

## A. C. ベンソン「仕事の楽しみ」訳

池 田 久 一

Arthur Christopher Benson (1862—1925) は英国の著述家で多くの詩・小説・随筆 (essays) の外に Tennyson, Rossetti, Pater 等の評伝でも有名になった, 一方 Eton の校長 (1885—1903), Magdalene College の学長 (1915—25) にもなり, 一生を教育界に尽したとも言える。本編は *The Thread of Gold* の中の一編である。

私は今日は極めて殊勝なことをしたいと思う, 即ち二つのプラチチュード<sup>1)</sup> を提言してそれを立証してみたいというのである。人が一つのプラチチュードに心から賛意を表し得るのは必ずや人生の厳粛なる瞬間なのである。プラチチュードとは素朴な心の人々が人生の階梯を一段一段と登り行き乍ら, その階梯から叫ぶところの声であって, 一つのプラチチュードの真なることを体験によって知るとは即ちその人が人生の階梯を一段高く登ったことを意味するのである。

第一の提言は, 世人の大部分はその好むところのことをなすというのであり, そしてその推論として, 世人の大部分はそのなすところのことを好むというのである。

勿論, 先づ始めに, 我々の大部分の者は何事かをすることを余儀なくされているということは当然のこととして認めてかかるねばならない。しかしそれはそうとしても, 自分の仕事にある興味を持ち, 更にその仕事にある流儀と能率とを以てやっているのだと心ひそかに得意としていない者は極めて稀である, と私には思われる。こういった風の何等かの自負心を持っていない人を見出すことは至極稀である。世人が我々の仕事に対して我々と意見を同じくすることは恐らくないであろう, がその仕事が多分に批評の余地ある人たちの場合に於てすら, 当人は批評を受ければ憤慨し, ひ

たすら賞賛を得ようと待ちかまえていることは、先ずまちがいないのである。

私は先頃かかる実例の珍らしく完全なものに出喰わした。私のよく行く教区では、その教会のオルガンの所謂指揮<sup>2)</sup> がとてもお話にならない程下手な奏者の手によってとられている——それは年輩の人で、諧調の一つとしてろくに弾けないし、またペダルを踏むにしても、それは試みにやってみる下手な実習といった風である。この演奏ぶりが最近教区内にかなりの憤激をひき起した、というのは教会に新しいオルガンが据えつけられたが、元の楽器よりずっと音が高く、我がオルガン奏者にはとても持て余し気味だからだ。土地の住民側では、牧師のもとに円形署名<sup>3)</sup> の請願書を差出し、旧本山法規の所謂プルサトール・オルガノーラム<sup>4)</sup>、即ちオルガン奏者を罷免して貰うことに殆ど決定しているのである。この前私が礼拝<sup>5)</sup> に出席すると、詩篇朗詠中に不思議なくらい適切な詩句が出て来て、詩篇は如何にも個々の信者にお告げを垂れるものだと思える人々の心に思いしらしめる程のものである。その詩句とは、「我願えり、我が仇敵さえも我に勝ち誇ることなからしめよ、そは我が足すべりたる時、彼等は我を侮り大に喜びたればなり<sup>6)</sup>」とある。この詩句の朗詠中かの楽師は不幸にも全く調子はずれの演奏をしたのである。私はやましい気持で教区委員長の顔をうかがってみると、その口元はびくびく動いていた。

その日の午後、散歩の途中で私はたまたま例のオルガン奏者に出会ったので、やさしい同情の口調で、新しい楽器の扱い難いことを彼に話しかけてみた。彼はきょとんとした顔つきで私を見ていたが、やがて言うには、楽器が変わるとまごつく者もあろうが、自分としてはどんな楽器でも同じ位に楽々と弾けると思うと。彼は更に言い続けて、彼が有名な音楽家たちから色々と褒められたことを述べたのであるが、私はそれはどうも記憶ちがいか、それとも慰めか或は皮肉の意味さえこめて言ったお世辞だったに違いないのだと思った。五分もすると、私はこの友人は大へんなうぬぼれの犠牲者であって、この世における自分の天職はオルガンを弾くにありと信じ切っているらしいのを発見した。

また私はこんなことを憶えている、それは私が小学校教員をしていた頃のこと、同僚の一人はその担任をしている教室に起る無秩序と喧騒とで全く評判が悪かった。私はある時ふと訓育の難しさについて彼と談話を交えてみた、それは彼が自分の苦悩を同情してくれる友人に打ち明けたら気が楽になろうがと思ったからである。ところがこの問題に対する彼の意見を聞いて私はどんなに驚いたことか、その意見というのは誰しも皆彼と同じ困難に直面しているのだが、その困難を手際よく、しかも峻厳に処理する点に於ては彼は同僚の大方よりも相当うまくやっているのだと明かに確信しているらしいのであった。

私は私の言う原則が殆んど世間一般に適用されることと信ずる、即ち極めて顕著なる失敗者だと見做されている、又そう見做されて至当な人たちと雖も、その心底をさぐり得たならば、皆自分の資格なり能力なりについては何等かのいい気な虚栄心を持っていない者はない、ということを我々は発見するであろうと信ずるのである。私の知っているうちでも、自分の仕事に対してとかく絶望的な言葉を洩らす人が多少いるが、この人たちは立派に仕事をしていながら、その能率の理想が非常に高い故に、その標準に些かでも外ずれると手厳しく自己批判をする人たちなのである。そればかりか、更にもう少し突込んで行くならば——例えば、もし人が彼等自身が既に自分の仕事に加えた批判に温情を以て相槌を打てば——彼等はどのような批判に対し深く憤慨しがちなのである。

私は尚進んで言うが、私のこれまでの生涯の中で、自分の仕事を立派になしとげ、しかもそれを格別自惚れることも嬉しがることもない人はただ一度見ただけである。これには異常なる意志の力と克己心とを要することは勿論である。

私は専門の職業を持った人が自分の専門の仕事から今まで得ていた以上の収入を急に得る身分となっても、尚その仕事の楽しみがずっと彼をその職に止まらせておく力ありと言うつもりはない。我々の大部分は愉快的正しいゆとりのある生活を送る権利ありというように不幸にして信じ切っている、そして何等専門的職業を持たぬ人間と近頃定義されているところの

所謂紳士<sup>7)</sup>の生活を送ろうという願望が我々大部分の心中に極めて根強く存在しているのである。

しかし、それにも拘らず、我々の大部分は自分の仕事を楽しんでいる、単に日一日と巧妙を加え上達して行くと言うことが、たとえその試みは完璧に程遠くとも、我々の誠実なる楽しみの源泉となるのである。そして一般的に言うならば、職業の選択は主として我々のなそうとする仕事に自分が適しており、又興味を持っているというある種の感じによって支配されるのである。

然りとせば、我々は幸福にも恵み深き妄想に捕われているのである。思うに、我々は次第に自分の仕事を愛するようになり、又自分の仕事のやり方にも自信を持つようになるのである。ある大説教者が曾て説いたことがある、我々はすべてが他人よりも富み、美しく、勇敢であり、又卓越していると信じるまでに自己を欺くことはできない。しかし乍ら我々のうちには、もし真実を明かしさえすれば、自分は他人よりも興味ある人間になるのだと心中ひそかに信じていない者もまずないのである。

仕事の話は暫く打切って、普通の社交上の話題に一転することにしよう。世間には下手の長談義がずいぶん多いが、その唯一の理由は彼等が自分こそは一座の者共に興味とお慰みを支えるに足る能力を備えているとの信念が、人々の間に広く受けとめられているものと思っているからだ。私は確信している。こうなると人はこのことを心に留めて、冗漫なくどくどしい話好きの唇から、さながらホースの口先からのように、注ぎ出るといくつな話の流れにも忠実に我慢して堪えねばならない仕儀となる。私は一度とんでもない失策をしでかしたのだった。私はある晩、後輩の多弁な知人に、ただ何かお気に召すようなことを言いたいばかりに、又これと言って取り立ててほめる程の特徴も見出せなかったのもので、ご懇切なおもてなしに興り愉快ですよとお世辞を言ったものの、その晩は引っきりなしのおしゃべりにあって、もだえる程うんざりしたのだった。私は自分の不謹慎な言辞をしみじみと今以後後悔しているのだ。というのは、米国人ならさしづめ我が被御世辞人<sup>8)</sup>とでも呼ぶであろうところのそのご当人からその後数え切

れぬ程の招待を受けているばかりでなく、その人と同席する度毎に、彼は立て続けに話しかけようと勇敢に試みるのである。その日からというもの幾度か、私は舌の殺人的毒害の力強さについて雄弁に叙述せる ヤコブ 聖人<sup>9)</sup> に共鳴したことであろう。話好きのうるさい男というのは、世間でよく思われている程には、単に利己的で面白くない人間ではない。往々にして小心翼翼として忠実に一つのやるべきことに精進する人であって、そうすることが彼にとって楽しくなっているのである。そういうわけで話好きは人間のうちで最も渇度し難い奴なのである。何故なら彼は概して、それを以て美德にして善行なりと信じているからである。

これを要するに、世人の他愛ない妄想は、こちらからそれを改め得る自信がなければ、攪乱しないでおく方がよい。殊勝な心がけの話好きの幸福のパネを壊すと重大な責任を負うことになる。仕事の上でも、社会生活の上でも、我が友人をおだてて自信をつけさせるようしむけた方が恐らくよいであろう。勿論、我々は悪徳有害な〔駄弁の〕快樂に友人を耽らせてはならないのであるが、又世間には勿論その冗慢が無害どころか、明かに有毒有害なたちの話好きもいる。一般的又は特殊的に興味ある問題に一寸ふれたばかりに、金輪際二度とその問題にふれまいと思わしめられる程に煩さい話好きも世間にはいるものだが、そんな輩は伝染病患者と同じで、人間の交際場裡からできる限り遠くへ隔離すべきである。しかしかくまでに極度に有毒なのは稀である。そこで一般的に言って、我々はある行為の實際的結果よりもむしろその精神を買うと言った場合においてさえ、程よきお世辞と賞賛を与えることは世の幸福を増進するに興って余りあり、又そうすることは我々をしてどのような社会からも熱心に歓迎され、求められる人気者たらしめる余徳もあるのである。

(注)

1) platitude=common remark, esp. one solemnly delivered—C. O. D.

常套平凡なこと、陳腐なことを得意になって話すこと。

2) What is called presided over オルガンは played「弾かれる」と言う代りに難しい presided over「指揮される」という語を用いたので what is called

「所謂」と断った次第。

- 3) a round-robin 誰が発頭人ともわからないように円形に署名した請願書
- 4) Latin : pulsator organorum 教会のオルガン奏者のこと。
- 5) service
- 6) “I have desired that they, even my enemies,” ran the verse, “should not triumph over me ; for when my foot slipped, they rejoiced greatly against me.”
- 7) gentleman 教養のある人格の立派な人, 趣味が高尚で振舞いの上品な人, 身分が高く勤労しなくても生活のできる人——研究社・簡約英和辞典
- 8) complimentee employee (被使用人) から洒落ての戯作語。この原文 the man whom the Americans would call my complimentee
- 9) cf. The Epistle of James——But the tongue can no man tame ; it is an unruly evil, full of deadly poison. Chap. 3, Ver 8. 「されど誰も舌を制すること能はず, 舌は動き止まぬ悪にして, 死の毒の満つるものなり」  
(日本聖書協会訳)